

初夏号

# 自費出版ニュース

株式会社 北斗プリント社  
HOKUTO PRINT CO.,LTD.  
TOTAL PLANNER - FROM DESIGN TO PUBLISHING



〒606-8540  
京都市左京区下鴨高木町 38-2  
TEL075-791-6125 FAX075-791-7290  
URL <http://www.hokuto-p.co.jp>

## 『多宝塔雑感』

— 多宝塔の歩みをめぐって —

吉田 和夫 著



A5判・並製・カバー装 七二頁

非売品

二〇〇五年に『仏塔散策』を上梓された著者の第二作である。七十二頁の瀟洒な本ではあるが、巻末に四十一葉のカラー写真が印刷されていて、前作同様に令夫人の俳句が影の形に随う如く添えられている。

現存する最古の多宝塔である石山寺の写真には、

湖の風近江に春を促せり

の句が掲載されており、時期は少しずれ

るが、芭蕉の有名な「行く春を近江の人とおしみける」を想い出させる。写真と共に俳句を鑑賞できるのも心憎い気配りである。

近畿は言うに及ばず、西は山口、東は千葉・埼玉まで足を延ばし国宝・重文の多宝塔全てを網羅した労作であると言える。直近の交通アクセスも記されており、本書を手にして多宝塔めぐりをするのにも便利なガイド役もかねている。

五重塔、三重塔は文学作品のテーマになっており、特に露伴の『五重塔』は有名である。

一方、多宝塔は知名度から言えばマイナーではあるが、本書のように多宝塔のみを専門にまとめた書籍は、他にあまり例を見ない。

非常にコンパクトでありながら、密度の濃い一冊になっている。

(評・広沢山人)



## 夫婦句歌集・『梨の花』と 『舞化粧』の発刊に際して

川北 允

私たち夫婦は医師・看護師として、私の郷里綾部東北部の山間僻地で二十数年間、地域医療に従事してきた。現在医師としての仕事に終止符をうち、京都下鴨に移り住んでいる。

この度、自分史として句歌集を編むことにした。幸いにして、妻とともに、これまで未熟ながらも詠んできた作品が、少しばかり溜まっていたのと、人生の「残照」の時期に入ってきたからである。そして子や孫にだけは何かを書き遺しておきたかった。

ところで、詩歌のよさは、或るイメージがどどん頭のなかで膨らんで、それが定着して、ひとつの「心象風景」として残っていくところにある。

さて、私の父は多事多難の一生であったが、短歌を詠むことに支えられて充実した余生を送っていた。

これに触発されたわけでもないが、父が他界してから、間もなく妻と私は俳句や短歌を詠んで句誌、歌誌、新聞などに投稿しはじめた。彼女は奈良の吉野で、私は綾部の山峡で育まれたのが幸いして、今にちの歌のしたしきともなっている。



2010年(平成22年)3月24日(水曜日)  
朝日新聞より

るのである。

そこで、ふたりの生活圏は大半が綾部の寒村辺地であったが、ここはまさに詩情豊かな処で、作品の殆どは、その自然を純粹にすくい上げ、ときには、時事詠をも混じえながら、基本的には写実的な表現を貫き透してきた。

そして、もっぱら好きな時、往診の途中、患者さんと対峙している時に浮かんだ風景・心象をすくい上げてきた。今回それぞれの句歌集は誌紙に掲載された作品だけである。そして、妻のには『舞化粧』、私の『梨の花』と題名をつけた。

ようやく、北斗プリント社の波多野茂男氏、その他の方々のご助力を得て句歌集が完成した。が、やはり孫たちに遺すだけではもったいない。お世話になった方々や、各同窓の皆さんにも近況報告かたがたお送りすることとした。

それぞれお送りした、翌々日あたりか

ら電話、お便りを多数の方々から頂いた。ご返事のなかには「へき地の医師の診療ぶりをみて、自分も医師を目指した。そしていま現実に医師として働いている」と医者冥利につきる文を、また別のあるお方からは、「この両著はまさにおふたりの分身であり、見事な相聞歌である」との文を頂き、ジンときた次第である。

最後に、サムエル・ウルマンの『青春』の詩ごころから、ウルマンの胸中を簡潔に代弁してみると、青春とは(一)夢があること。(二)その実現のために情熱を燃やしていること。すなわち「夢×情熱＝青春度」なのである。

わたしたちも、「残照」の時期にありながらも、青春度だけは高めておきたいものだと思う此の頃である。

A5判・並製 一二四頁



非売品

## — わがまち —

## 本能・油小路界隈を出版して

村田 茂雄

「灯台もと暗らし」とは良く言ったもので、京都に生まれ育つていても、自分の町内、お隣の町内のこと、学区内のことなど自分自身に問いかけてもドレダケ知っているか自信のない私。

定年退職しました年に、家のまえにありました元本能小学校の取り壊しがあり、そのあと京都市埋蔵文化財研究所による本能寺跡の発掘調査がまる一年かけておこなわれました。前の住人でもあり、二階のテラスから発掘状況を見ることができました。二度の調査結果の公開行事もあり参加しました。もともと歴史好きの私でしたので発掘された地層から江戸・桃山・室町・平安時代と掘り下げての状態の説明があり、その地層に京都の建築でどうしても必要なじゅうらくの土の層があり、地元で供給できていたことと興味しんしんで千年の都の様子を見ることが出来、いかに豊富な水に支えられて人々が生活してきたかがい知ることができました。鍾馭（しようき）さん、第二次世界大戦時の建物強制疎開に関心をもっていましたので、これらをテーマに地元紙へ投稿を始めました。平成二十一年四月二十三日に自費出版したいと北斗プリント社様を訪問しました。素人の書いたものを本とする為のいろいろなヒント・アド

バイス・ノウハウのご指導を受け掘り下げて調べる機会を得ることができましたし、もつと頁数を増やさないとのことのお言葉で、五月のゴールデンウィークは連日翌朝の一時までパソコンにむかい一日一作のペースで書き上げました。その結果、今回の本という形になりました。早速、情報収集に協力くださった皆様へ、本能・乾・明倫・格致・醒泉・龍池学区の方、友人・知人へお届けしました所、読んでくださった方の中から三十二名と多くの感想文を頂戴しました。目次も第一章の元・本能学区のあれこれ地元のことを取り上げ、第二章の京の大路小路、第三章には明治は面白い、この項目は注目された方が多かったです。第四章の八坂神社と祇園祭では実際にお祭りに係わっておられる方から大変参考になりますとのことのお言葉を頂戴し、第五章のおおきにはばかりさんでは、私が京都通信病院の桜守として活動させてもらっておりま

すし、京都人として、このタイトルの本当の意味に惚れ込んでおります。表紙の写真は地元の方からは好感度であったようで、今昔対照の写真には大変親しみやすいとのことのお言葉が多く、著者の京都を愛する気持ちが溢れていますとの嬉しいお便りもあり、本その物は薄いが中味は厚いとのことのお便りもあり、著者冥利に尽きることでありますが、この本そのものに、箔が付きましたのは、平成二十年十一月一日に天皇・皇后陛下が京都にお越しになり、古典の日に決まりました。六月十六日に波多野様からお電話があり、京都商工会議所内の古典の日推進委員会を訪問

し、早速、申請用紙を提出、一週間後に古典の日のシンボルマーク・ロゴマーク使用の許可を得ました、多分第一号の取得で本の折り返しに採用できましたことは、本の価値（さすが京都の本として）がありがとうございました。これも私の原稿の下読みから編集・印刷・製本までプロの立場から助言くださいました（株）北斗プリント社の相生隆久様・波多野茂男様とスタッフご一同様に万腔の感謝を捧げたいと存じます。

一生に一度の本の出版と今年の最大の目標に掲げ、一月から着手しましたが本当に良い本が出来上がり感謝・感謝の日々を過ごしており、三條商店街の本屋さんの大野文省堂さんが運勢占いを出してこれ、村田さんが今年だされたことは大成功、来年ならケチヨンケチヨンですよと言われました。多くのみなさんから、第二弾を出されることを期待しますときておりますが運勢占いが怖いわたくしの心境です。

A5判・並製・カバー装 一四四頁

定価 一、二〇〇＋税





『ワカゲノイタリ』

橋爪 志保 著

二〇〇八年に上梓されたものの第2版本であるが、評者がまず驚いたのは、これが十五歳の少女が書いたものと知ったからである。

戦前に教育を受け、藤村・白秋・朔太郎に親しんで来た評者の世代には、現代詩はどうにも近寄り難い。難解、晦渋のイメージが先行して食欲が湧かないのである（茨木のり子の作品は珍しく例外である）。

本書を繙いて気がついたのは語彙が豊富であり、しかも決して難しい言葉を使わず、カタカナ、ぶっちゃけなど当世風の若者ことばを適宜入れこんで詩を紡いでいる。大仰な言い方をすれば、まさにアンファン・テリブルである。

このような豊饒な日本語の海を自在に泳げる少女は、さぞかし素晴らしい読書環境で育てられたのだと思う。

第二作が楽しみである

出版不況と言われるほど日本人（特に年寄）は書物を読まなくなつて久しい。

漱石・鷗外が古典扱いになり、『舞姫』は井上靖訳でやっと読めたかと自慢気に言った人には腰を抜かした。

グラビア六枚を含めソフトフォーカスの写真も楽しい。カバーデザイン、レイアウトもすべて著者がパソコンを自在に操って作業したものである。

(評S・H)



A5判・並製・カバー装 一一〇頁

非売品



編集後記

少し遅くなりましたが、平成 22 年度の自費出版ニュース、第 2 号の発刊となりました。

暖かくなると、著者の皆様の筆運びも滑らかなるようになります。おかげさまで、素敵な本をたくさん刊行することができました。そういったものづくりの現場に携わることができ、編集者としても嬉しく思います。

まだ制作中の本もたくさんあります。次号でもまた素敵な本をご紹介しますと思います。

編集責任者 相生 隆久

第 13 回日本自費出版文化賞  
応募作品選考予定

■応募点数 計 637 点

〈地域文化部門〉	90 点
〈個人誌部門〉	135 点
〈小説・エッセー部門〉	173 点
〈詩歌部門〉	88 点
〈研究・評論部門〉	82 点
〈グラフィック部門〉	69 点

■最終選考会 22 年 9 月 1 日

■表彰式 22 年 10 月 30 日

(於・東京千代田区アルカディア市ヶ谷)